

エデュコ **Educo**

地球時代の教育情報誌

No.30
2013年冬

巻頭インタビュー p.2

元メジャーリーガー

野茂 英雄さん



知っておきたい教育NOW p.4

確かな学力が身に付く学習評価の在り方
子どもを育てるための学習評価

きょういく見聞録 p.8

町の子どもは町全体で育てる
新潟県湯沢町立土樽小学校

地球となかよしトピックス p.10

音読のまち ながれやま —言葉と心を声にのせて—

インフォメーション 北から南から p.12

第10回 地球となかよしメッセージ
入賞作品発表 p.14

地球となかよしゼミナール p.18

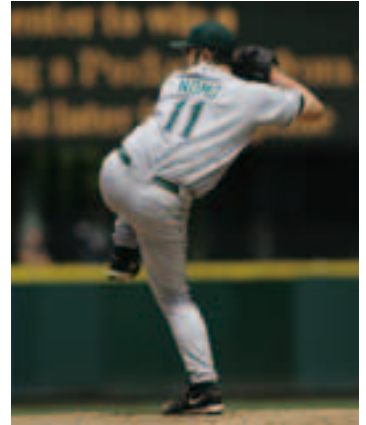
海と生きる 岩手県大船渡市立末崎中学校

コラム 疑似科学とのつきあいかた p.19

ほっとな出会い p.20

群馬大学大学院
准教授

金井 昌信さん



©ジュン鈴木

本当のものは、 自分でつかむしかない。

元プロ野球選手・メジャーリーガー **野茂 英雄**さん

2003年に、社会人野球チーム「NOMOベースボールクラブ」を設立されました。

僕は、甲子園出場などの経歴はありませんでしたが、卒業後、運よく社会人野球に進むことができました。そこで経験させてもらったことが、その後の僕をつくったと言っても過言ではありません。しかし、昨今の経済情勢で、社会人のチームは減る一方です。だから、志のある選手、環境に恵まれない才能のある選手が野球を続け、プロに挑戦できるチャンスをつくりたかったのです。

もう一つ大きな理由があります。NOMOベースボールクラブで育ち、プロで活躍した選手が、将来、自分の経験を踏まえて、ここでまた、未来の選手を育てる行動に移る。そのサイクルをつくりたいと考えているからです。

※1 ジュニアオールジャパンに参加する子どもたちにも同じ思いをもっていきます。経験で得たものを、自分自身の向上に生かすのはもちろん、周囲にも影響を与えてほしい。それを期待するからこそ、子どもたちに多くの経験を積める機会をつくっています。

NOMOベースボールクラブは、今年、兵庫県の豊岡市に本拠地を移しました。豊岡市には熱心に誘致していただし、また、城崎温泉組合が選手の働き場を提供してくださって、

選手たちが働きながら、しっかりと練習ができる環境が整いました。これからは、地域と一緒にのチームづくりにも積極的に取り組みたいですね。子どもの野球教室開催や地域イベントへの協力、そして、高いレベルの試合を多くの方に見てもらい、応援してもらえようになりたいと思っています。

アメリカ・メジャーリーグに挑戦して活躍し、日本人メジャーリーガーの先駆者となりました。

なぜメジャーリーグに挑戦したか。「野球をやりたくてしかたがな



かった」の一言に尽きます。当時は「通用しない、すぐ日本に帰ってくる」とか、いろいろなことを言われたのですが、何を言われても自分のやりたいことをやり抜くんだと思っていましたから、気にしませんでした。

マウンドが上がって、失点をゼロに抑えることが僕の役目。それだけを考えていましたから、言葉や食事の違いなんかも全く気にしませんでしたね。

投手として肝心なのは、マウンドが上がっている僕が、いかにチームに信用されるかだと考えていま

※1 ジュニアオールジャパン

NOMOベースボールクラブ主催。ボーイズリーグ・ヤングリーグから選抜された中学生が、アメリカ・ロサンゼルスに遠征し、地元チームとの試合や大リーグ観戦、ホームステイなどを体験する。

た。エースに必要なのは、グラウンドで感情を顔や態度に出さないことだと思っています。これは、社会人野球時代に先輩から教えられたことです。エースが自分の都合で好不調を外に表すと、チームメイトからの信頼は得られない。アメリカでは複数の球団に行きましたが、どこに行っても、チームに溶け込み、皆の信用を得るために、このことは肝に銘じていましたね。

僕は、若い人に、どんどん海外に出て、いろんなものを吸収してほしいと思っています。ジュニアオールジャパンでアメリカに遠征してもらうのも、それが目的です。高いレベル、全く異なる文化に接し、今の自分に満足してしまわずに、上を目指

す気持ちをもってほしい。挑戦しないと成功ありませんから。

今、若い選手が海外でプレーすることに挑戦しようとする、大人がつくったルールに縛られてしまうことが多く、残念に思っています。野球に限らず、受験や就職も同じかもしれません。

海外で身につけたものを持ち帰ってもらいたいですし、そうしないと、国内でやっているものが伸びない。日本のやり方はすばらしいかもしれないですが、異文化に触れ、違うやり方を経験した人が日本の社会に入る。そのことでまた、日本のやり方も膨らんでいくのではないかと思っています。



**青少年育成活動にも力を入
れておられますが、指導者
としてどのような考えをお
もちでしょうか。**

NOMOベースボールクラブの若い選手たちは皆、野球教室やイベントでも率先して動かし、練習もまじめです。ジュニアオールジャパンの中学生たちも、毎年、本当にしっかりした

子ばかりです。ただ、はじめすぎて、こちらの言葉を待って、そのとおりにしようとしている気がしますし、わからなくなったら教えてもらえるのを期待している感じがちよつとするかなど。僕やコーチの言うことを理解してやってくれるのはいいんですが、そこからもう一歩踏み出してほしい。

僕が選手たちに求めているのは、自立してほしいということ。何でもかんでも大人やコーチが教えてくれるような環境は、つくりたくない。最後は、自分の力でものにしてもらいたいんです。そうでないと、本当のものがつかめない。僕自身、経験を積んでいくなかで、自分のあり方をつかんだと自負しているからです。僕はプロ野球に入るとき、打球フォームを絶対に変えないということを契約の条件にしたんですが、^{*2}仰木さんは僕の信念を認めてくれました。若い人たちにも、自分でつかんだやり方は貫くと主張するぐらいの貪欲さがほしいな、と思っているところです。

そして、僕がよく思うのは、「責任をとる」とは、辞めればいいということではないということです。最

後までやり抜く覚悟をもつことが、責任ということではないでしょうか。何かに挑戦するときに、失敗したら辞める覚悟、というのではなく、もし失敗したら、それを覆すような行動をとる。大人のそういう態度を、子どもたちにも見せ、子どもたちにもそれを求めるのが大事ではないか、と僕は思うんです。

野球選手の育成も同じです。うまくいかなかったときに、失敗したからだめと決めつけるのではなく、またチャンスを与えることも大事です。その子があきらめないように、そして、自分で失敗を克服できる、自立した選手になれるような指導をするのも大事だと考えています。

そういった指導は、上に立つ人がまず自立しなければできないことでしょう。そして、先生や指導者を管理している人たちも、そうでなければならぬ。信念があるなら、責任をもつてやりとげてほしいのです。

PROFILE

1968年大阪府出身。府立成城工業高校卒業後、社会人野球・新日鐵堺でプレー。88年のソウル五輪では日本代表として銀メダル獲得に貢献した。90年プロ野球・近鉄に入団、「トルネード投法」を武器に最多奪三振など多くのタイトルを獲得。95年アメリカメジャーリーグ・ドジャースに移籍。アメリカでは、2度のノーヒットノーランを達成するなど、12年にわたって活躍した。

*2 故・仰木彬氏。プロ野球近鉄・オリックスの監督を務め、野茂選手やイチロー選手を育てた。

確かな学力が身に付く 学習評価の在り方



岐阜市立東長良中学校
教頭 後藤 喜朗

本校における評価の考え方

東長良中学校では、「共に自立をめざす生徒く求め、見つめ、確かめ合う」という学校の教育目標の具現に向けて、教科指導を核として教育実践に取り組んでいる。特に、学習評価については、教科指導における重点の一つとして位置付けている。

学習評価では、生徒が、教科の学習に対する目標や願いをもって学習に取り組み、得られた結果や学んだ内容について振り返り、確かめていく。このことが、「分かった」「できるようになった」という実感を生み出し、その「学びの実感」が、今後の学習意欲、ひいては、確かな学力の定着につながると考えている。

生徒が「学びの実感」を得るために、私たち教師は、生徒の学習の様子や結果について確実に見届け、認め・褒め・励まし、方向付けることが重要だと考える。そこで、学校経

営で大切にしている考え（計画―実践―評価―改善―発展―共有のサイクル）を学習活動の中に生かし、学習評価を次のように行うこととした。

生徒の「自己評価調査シート」の作成

本校では、**【図1】**に示すような「観点別評価シート」を作成し、これに基づき、**【図2】**に示すような「自己評価調査シート」を活用して、学期毎に調査を実施している。

「観点別評価シート」の作成においては、国立教育政策研究所から示された評価規準を参照している。本校が、独自に作成した教科カリキュラムに示す指導内容との整合性が図られるように、表記にも配慮をしている。また、この「観点別評価シート」は、学期末に行う保護者も含めた三者懇談で、生徒の学習状況について説明する際の資料としても活用している。

さらに、この「観点別評価シート」では、

今学期の各教科の学習活動の中で、生徒が、「もう一度学び直したい（復習したい）こと」「もっと深く追究したいこと」「自信がもてたことや、これから頑張りたいこと」について記述できる欄を設けている。それにより、一人一人の生徒が課題意識をもって、学校が特設する「学び直しの時間」（学期末に5時間程度）に臨むことができる。このように学習評価を活用することで、生徒の学力の伸長につなげたいと考えている。

本校独自のシラバス集の活用

既述したように、「自己評価調査シート」を活用した学習評価を効果的に行うために大切なのは、生徒一人一人が学習に対する願いや目標をもつことであると考えられる。そのため本校では、学年ごとに「シラバス集」を作成している。年度当初や単元導入時にこれを活用して、生徒が、学習への見通しとともに、単元で身に付ける力や評価の方法等についての理解を得ることができるようになっている。

また、定期テストの各設問と「観点別評価シート」に示した項目との関連について説明し、生徒の自己理解を深め、自己評価の際に生かせるよう、配慮している。



▲シラバス集 岐阜市立東長良中学校作成

学習状況分析の実施

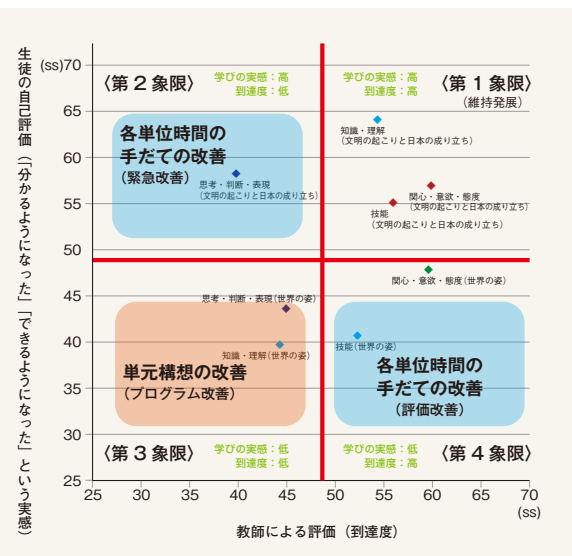
これまで、生徒が自己評価で自身の学力の定着状況を理解すること、「学び直しの時間」等を活用して、学力の定着を図っていること

【図2】英語科における自己評価調査シート

英語科 学習の記録【前期】

2年 組 番 氏名		教科担任名		
観点	評価規準	具体的な評価基準		評価
関心・意欲・態度	言語活動に積極的、意欲的に取り組んでいる。	自ら学んだ表現などを進んで使いながら、話したり書いたりしている。		A
		聞いたことについて感想や意見を述べようとしている。		A
表現の能力	さまざまな工夫をしながら、コミュニケーションを続けようとしている。	話し手に反応しながら、コミュニケーションを続けようとしている。		A
		伝えたいことが聞き手に正しく伝わるように話することができる。		A
		正しい強勢、イントネーション、発音などを用いて音読することができる。		A
理解の能力	初歩的な英語を用いて、場面や相手、目的に応じて適切に表現することができる。	伝えたいことが読み手に正しく伝わるように書くことができる。		A
		伝えたい内容を適切な語句や表現を選択し話すことができる。		B
知識・理解	初歩的な英語の情報について、全体の内容を正しく理解することができる。	英文を聞いて、全体の内容を正しく聞き取ることができる。		B
		英文を読んで、全体の内容を正しく読み取ることができる。		A
		英文を聞いて、大切な部分を聞き取ることができる。		A
知識・理解	言語や言語の運用についての基本的な知識を身に付けている。	英文を読んで、大切な部分を読み取ることができる。		A
		単語について、用法や意味などの知識がある。		A
		文型・文法事項、英語特有の表現について、用法や意味などの知識がある。		A
		場面や状況にふさわしい表現を知っている。		A

【図1】英語科における観点別評価シート



【図3】教師による評価と生徒の自己評価の相関を示す座標

このように、本校では学習評価を、生徒一人一人の自己理解を促すだけでなく、教師自身の指導の在り方や、単元構想の組み方の見直しに生かすことが重要であるととらえている。今後も、学習評価を教師の指導技術の改善に生かし、生徒に確かな学力が身に付く方途として、さらに研究を進めたいと考えている。

を述べてきた。

一方、学習内容の中には、私たち教師の単元構想に課題があり、生徒の理解が十分に得られないこともある。よって、生徒による自己評価の結果を生かした学習状況分析を行うことを考えた。そこで、次のような手順で分析を行った。

- (1) 生徒の自己評価を行う。……自己理解の結果を、観点別に、AⅡ5点、BⅡ3点、CⅡ1点で換算する。
- (2) 教師による評価を行う。……授業中の観察やテストの結果等に基づき、一人一人の生徒の状況を4段階で評価する。
- (3) 座標に偏差値を表す。……(1)(2)の項目の平均をとって偏差値に換算し、座標

(縦軸は「生徒の自己評価」、横軸は「教師による評価」)に点を打つ。これによって得られた結果を示したものが、【図3】である。第2・第4象限に分類された単元は、単元時間の指導の手だてを改善すれば、生徒の理解度を伸ばせると判断できる。また、第3象限に位置付けられた単元は、単元構想そのものから改善を図らなければならないと判断できる。

生徒の「学びの実感」度と、教師の「到達度」評価を組み合わせることで、教師の単元構想や指導技術の改善の道筋が見えてくるのである。

子どもを育てるための 学習評価



横浜市立桜岡小学校
校長 坂田 映子

評価を拠り所とした授業改善

桜岡小学校は、「信頼される学校を目指して」授業評価から授業改善へ」を研究主題に、横浜市教育委員会より、「パイオニアスクールよこはま」の指定事業を受け、授業改善を進めている。学習評価・授業評価を授業改善の拠り所として積極的に研究を進め、子どもの学力向上に取り組んでいるところである。

本校では、学習評価を行うに当たって、次のような考え方に立っている。

- (1)子どもにとって、学習評価は、自分を振り返るきっかけである。自己を評価する力が高め、自分のよさに気付く評価であるようにし、その後の学習に役立てるものとする。
- (2)教師にとって、学習評価は、基礎的・基本的な学習内容などの、学習状況の達成の程度を把握し、評価するものである。確かな学力を身に付けることに役立つよう、授業

改善に役立てるものとする。

- (3)教育課程では、カリキュラムマネジメントに生かすよう、PDCA（指導計画（P）、授業実践（D）、学習評価（C）、授業改善（A））のうち、C・Aを強化することで、子どもの確かな成長を保障していくものとする。

以上のようにとらえうえて、授業では、特に学習過程を重視して評価を進めている。

「振り返りカード」による自己評価の工夫 子どもとつくりあげる評価

子どもたちは、「学習活動に即した評価規準」に沿った「振り返りカード」に、「何がどう分かったのか」を記載する。

教師には、「思ったように授業が進まない」「子どもに期待通りの力がつかない」といった課題が発生する場合もある。こういった課題に対応できるよう、「振り返りカード」には、評価規準を分かりやすく対応させた項目を置

き、発生した指導計画からのずれを解消できるようにしている。

この「振り返りカード」は、スキルの育成状況を把握するアセスメントシート作成にもつながり、ポートフォリオ評価資料としても効果を上げている。「子どもとつくりあげる評価」として本校になじんでいるものである。

授業評価システムの構築と

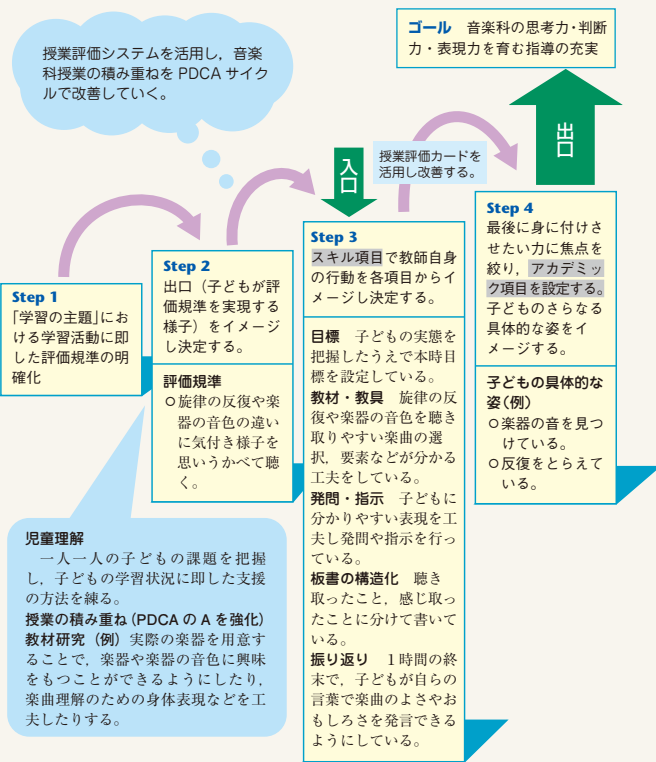
授業評価カードの活用

以前は、本校の授業を概観すると、授業の評価方法や評価結果が十分に活用されていない、教師の授業改善への取り組みに差が見られる等の課題が散見された。そこで、授業力とは、「授業を通して、子どもに確かな学力を定着・向上させるための力」という共通理解のもと、効果的な評価方法を用いて、教職員同士が授業評価をし合い、結果を共有し生かしながら、学校全体の授業改善を組織的に行う授業評価システムをつくった。

本校では、授業力を把握する方法として、①週案の記載から把握（管理職）②授業参観者の評価シートを基に把握（教師等）③児童のテスト、レポート、成果物などから把握（教師）④授業評価を構成する要素に関するチェック項目をまとめた「授業評価カード」で把握（教師等）、を挙げている。とりわけ、「授業評価カード」については、指導事項をしっかりと押さえるための具体的な指導法、手立てを明確にし、焦点化できるように、次の

～スキル項目・アカデミック項目から授業を見る～

授業評価システムを活用し、音楽科授業の積み重ねをPDCAサイクルで改善していく。



二つの項目を設定して、授業力向上に資する。これらの項目は、教師のできばえを評価するものではなく、「次はこのように改善しよう」という課題を明確にして、教師が互いに授業を高め合うサポートツールである。

(1) **スキル項目**：教師の行動的項目。教師の目標達成の手立てとして、授業の展開を支えるのに必要な【①目標設定 ②教材・教具 ③発問・指示 ④板書の構造化 ⑤子どもの振り返り】の5項目のスキル。

(2) **アカデミック項目**：教科の指導内容そのものに関するもの。各教科等の単元、主題等に関する、最も実現させたい、学習活動に

即した具体的な評価規準・評価方法。スキル項目とアカデミック項目を関連付け、授業改善へアプローチしていく「桜岡モデル」を、図表に示す。

ステップ1…単元や1単位時間における評価規準を明確にする。ステップ2…子どもが、評価規準を実現している様子を出口としてとらえ、イメージし決定する。ステップ3…入り口と考えられるスキル項目を設定し、教師自身の行動を各項目からイメージする。ステップ4…身に付けさせたい力に焦点を絞り、子どものさらなる具体的な姿をイメージしながらアカデミック項目を設定する。

このように、四つのスモールステップを段階的に設定していく中で、指導案検討や先行授業、教材研究を行い、子どもの思考力・判断力・表現力を育成できるようにする。教師が授業評価カードを記入するに当たっては、教師の意図と子どもの学びとのずれがどの程度あるのか、本時での評価規準が

達成されているのかを考えるようにして、教師自身のゴールをはっきりさせる。

これを基に、教師間で、子どもが何をできるか、何をできないのかを話し合い、自分たちが求める学力が付いているのか、認識を共有して、授業の問題点や改善点を整理できるようにしていく。また、管理職は、子どもに思考力・判断力・表現力をどの場面で身に付けさせようとしているか、課題解決型の学習になっているかを重点的に見るようにして、それぞれの教師のキャリアステージに合わせてアドバイスするようにしている。こうして、「課題↓成果↓改善点↓次への課題」という授業改善のPDCAサイクルが着実に機能するようになった。

その結果、本校では、子どもたちの学力の伸びが、特に活用面において見られるようになってきている。

おわりに

子どもの振り返りカードや、教師の授業評価シートを活用することで、板書が分かりやすくなったり、発問が厳選されたりするなど、授業改善に確実につながっている手ごたえを感じているところである。

これまで、国語科と音楽科を中心に授業評価の研究を進めてきたが、他の教科でも十分に活用できるように、さらに内容を精査していきたい。

皆、各地域の事情や地域にどんな方が居住しているかなどに詳しく、大変信頼できる方たちである。全員が、業務としての学校支援活動は初めてであるが、「コーディネーター連絡協議会」では、公民館関係者や町教育委員会の生涯学習班などにもその都度参加してもらい、事業の説明や意見収集などを行っているところである。

地域住民の支援意欲をコーディネーターが喚起

統合に当たっての住民アンケートでは、「学校が大きくなると知らない子が増えるので、学校を訪ねるのに気が引ける」「学校が遠くなるので気軽には行きにくい」といった、学校と地域とのつながりが希薄になることを懸念する声も多く寄せられていた。

現在は、地域住民と子どもたちが、もともと顔見知りだから支援しやすいという面がある。現在、各小学校の児童数は、少ない学校で6人、一番大きな学校でも160人ほどである。しかし、町全体の子どもたちへの支援となると、心理的なハードルが大きい。このハードルを乗り越えるためにも、コーディネーターが、地域住民の「支援したい」というモチベーションを高めていくことが必要になる。

現在、人材バンクには多くの方が登録してくださっている。しかし、前述のように、各学校は小規模で、地域の人材が豊富でも、貴重な技術や知識を伝える機会が限られていたともいえる。湯沢学園の新設は、湯沢町全域の人々の積み重ねてきた知識や技術を、多くの子どもたちに伝える、またとない機会ではないだろうか。

地域住民の学校支援への意欲を喚起するには、学校支援に参加し、培ってきた知識や経験を子どもたちに伝え、子どもたちの育ちに手を貸していくことが、多くの出会いを生むということ、それとともに、自己実現・生涯教育の場ともなることを説明していくことが重要になろう。参加者のやりがい、生きがいの感得、つまり「生涯学習」の視点である。

既に、地域を超えた学校支援が動き出している。

例えば当校では、「書き初め」指導において、止め、はね、払い等の運筆の指導が難しいとの教員の声があった。これを受けて、コーディネーターを通じて、当校区からやや遠方に居住されている書家を紹介してもらうことができた。書家は、「書のすばらしさを子どもたちに伝える機会を得ることができた」ことを、ことのほか喜んでくださった。

湯沢町の各校では、スキー指導補助、登山引率補助などにおいても、保護者や地域住民に大きな支援を受けてきた。湯沢町には、ウインタースポーツや登山などで、プロ並みの技術を持つ住民も多い。また、日本一おいしい米といわれる「魚沼コシヒカリ」の産地でもあり、住民から地域の特性を生かした農や食について学ぶことも可能だ。町の子どもたちが皆等しく、町のことを、町のすばらしい方々に学ぶ機会が増えること、町の人々が技術・知識を伝承する機会が増えることで、子どもも大人も、ふるさと湯沢をよく知り、好きになってほしいと願っている。このような取り組みが、子どもたちが大人になったとき、湯沢町に住みたい、湯沢町をもっとよくしたいという思いにもつながるものと期待している。

湯沢町では、高齢化が進んでいる地区も多い。お年寄りたちの豊富な技術や知識を、学校支援や生涯学習につなげたくても、自ら車を運転したり、バスに乗って学校のある地区へ山間部から「下りてくる」のは、なかなか難しい面がある。新生・湯沢学園には、地域交流のためのスペースも確保されることから、構想の段階ではあるが、社会教育の一環として、巡回バスの利用も考えているところである。予算化にしても、事業の進め方にしても、縦割りではなく、学校単独で行うのではなく、行政の各方面とタイアップして、町をあげての協働事業として取り組んでいる。

学校教育の充実、生涯学習の場、地域の教育力の向上等、子どもたちへの確かな成長支援につなげる体制づくりのため、「町の子どもは町全体で育てる」視点を全町民で共有し、湯沢学園開校に向けた着実な実践と確かな成果を積み上げていきたい。



▲旧湯沢高校跡地に誕生する統合文教施設「湯沢学園」完成イメージ図。夏には近くを流れる水路の水を利用して校舎の一部を冷房するシステムを導入するなど、環境にも配慮している。

町の子どもは町全体で育てる ～町内各地区との「協働」の視点を求めて～

湯沢町は、新潟県南部に位置し、川端康成の小説「雪国」の舞台となった地である。豊かな自然に恵まれ、登山、温泉などに、多くの観光客が訪れる。ウィンタースポーツも盛んで、アルペンスキーオリンピック代表の皆川賢太郎選手は、湯沢中学校出身だ。

しかし、近年の人口減・少子化に伴い、町内に5つある小学校は、小規模化が進んでいた。また、唯一の中学校である湯沢中学校では、建物の老朽化が進み、建て替えが検討されてきた。

これを契機に、教育環境の改善と充実した教育をめざして、平成26年4月に統合文教施設「湯沢学園」の開校が予定されている。5つの小学校と1つの中学校が、施設一体型の小中一貫校となるとともに、平成27年7月には、認定こども園を同一敷地に設営する計画が進められている。従来、各校区で進められてきた地域との連携、支援体制等について、これからは全町内、全地域で行う視点が大切になってくる。



「町の子どもは町全体で育てる」視点から、学校支援の体制をどうつくっていくか、考えてみたい。

新潟県南魚沼郡 湯沢町立土樽小学校 校長 松崎 一昭

コーディネーターに焦点を当てて

これまで、町内の各校では、数十年にわたって、保護者や地域住民から成る人材バンク等から支援を受けてきた。この学校教育支援の貴重な財産を引き継ぎ、新生・湯沢学園で活用していくために、次のような計画を進めている。

今年度初め、統合に向けて、校園経営・連携部会、教育課程部会、学校行事部会、学校統合部会、そして、町内小中6校の教育支援活動に向けた「地域連携部」が新たに設置された。この地域連携部を、現在、当校が担当している。

文科省が平成20年度より推進している「学校支援地域本部事業」では、中核となる役割として、「地域コーディネーター」がある。学校やボランティア間等の連絡調整などを行う他、事業の実質的な運営等を担う立場である。学校（教職員）が教育活動を行うに当たっての「こんな人材がほしい、こんな取り組みをしたい」といった願いと、地域（保護者、住民）からの「こんなことをしたい、こんなことができる」等の知識や経験を調整し、結びつける役割を担う。湯沢学園の新設に当たっては、このコーディネーターの働きを重要視して、各地区の協働と、統合後の学校のつながりを構築していくこととした。

学校支援へ参加しやすい体制づくり

各地区では、学校統合により、住民のコミュニケーションの場がなくなるという声が聞かれた。湯沢町の各地区では、小学校が地域の教育センター的な役割を果たしている面がある。子どもたちとの関わりももちろんだが、地域のふれあいの場がなくなるという心配の声があがっていた。そのような声に対応するものとして、コーディネーターは重要な役割を果たすものとする。ボランティアを募って学校へ派遣するだけでなく、ボランティア間のつながりをつくり、人と人の交流を活発にすることが、コーディネーターの大切な仕事となる。これがすなわち、地域住民どうしのつながりづくりにもつながるからである。

今年度、5つの小学校、1つの中学校にそれぞれ1名ずつ、合計6名のコーディネーターを配置した。コーディネーターは、地区公民館館長（4名）、保護者（2名）をお願いした。



▲土樽小学校での、地域のサークル「かすみ草の会」によるボランティア活動。花壇づくりや校内に花を生けるなどして子どもたちの心をなごませている。



◀向小金小学校1年生の二人組は、宮沢賢治の詩「雨二モマケズ」を暗誦。言葉の意味をしっかりとらえた、情景が浮かんでくる熱演に、涙ぐむ観客も。東深井中学校1年生「オツベルと象」の間合いや声の抑揚を工夫した表現は、思わず息を飲む迫力。

地球となかよし
トピックス

千葉県流山市

音読のまち ながれやま

— 言葉と心を声にのせて —

読書活動がさかんな流山市。市内の市民団体や小・中学校は、4年連続で「子どもの読書活動優秀実践団体」として、文部科学大臣表彰を受けています。なかでも活発なのは、音読・朗読活動。平成18年度からは毎年、子どもたちが日ごろの成果を披露する「音読・朗読発表会」が開催されています。7回目を迎えた今年度は、市内12の小中学校から、18チーム、計177人の児童・生徒が参加。会場いっぱい、思いを込めた声が響きわたりました。

楽しむことが何よりもすばらしい

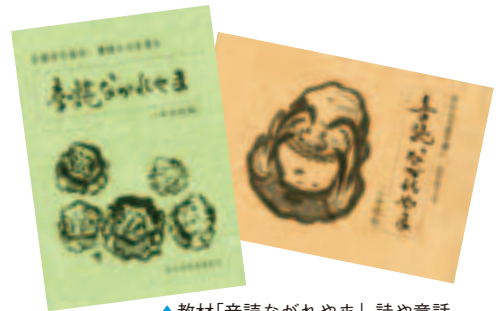
この日の発表会で披露されたのは、枕草子から「春はあけぼの」、宮沢賢治の童話「雪わたり」を自分たちでシナリオ化した作品など、多種多様。作品をしっかりと読み込み、言葉を自分たちなりに解釈しながら、作品の味わいが伝わるよう工夫を凝らした発表の数々に、会場からは惜しみなく、大きな拍手が送られました。

発表会は、市民有志のボランティアが実行委員となって支えています。「子どもたちに楽しんでほしいというのが、発表会の出発点なんです」と、主催の「流山市子どもの読書推進の会」

朗読で培う「伝える力」

伊藤基会長。「晴れの舞台で発表すること、多くの人に思いが伝わることを実感できるし、ほめてもらうことで自信がついて楽しくなる。その楽しさが、もっと表現したい、学びたいという意欲につながっています。子どもたちの喜びはそのまま、実行委員の喜びです。子どもたちの姿に感動して、保護者からのボランティア参加の申し出も増えているんですよ。」

市内の小・中学校では、市独自の副教材「音読ながれやま」を使って、音読・朗読活動に継続的に取り組んでいます。



▲教材「音読ながれやま」。詩や童話、古典や俳句など、さまざまなジャンルの作品を掲載。

◀流山北小学校6年生の授業風景。国語の授業で、流山市に縁の深い小林一茶の句を暗誦。友達で作った俳句を添削したり、たくさん辞書を引いたり、豊かな言葉を育てる取り組みが工夫されている。「音読をするようになって、自分の伝えたいことが、聞いている人にわかるような言い方をするようになった。」と6年生。

「音読ながれやま」を毎日の読書活動で活用している流山北小学校の野崎肇とこ子校長先生は、音読・朗読が、子どもたちに「伝える・聴く喜び」を生んでいると話します。「言葉によって相手の気持ちや考えをわかろうとし、建設的な意見を出し合い、合意形成しながら、新しい知恵を生み出せるような、自立した大人になってほしい」と思っています。それには、言葉で伝える力、そして言葉を聴く力が必要です。豊かな言葉でやり取りをすれば、それだけ広い考え、深い考えがもてるようになりますね。」

受け継がれる、音読の喜び

客席で観客とともに、満面の笑顔で子どもたちを見守っていた、後田博美教育長。「友達とともに朗読に取り組んだり、上の学年や大人の朗読を聴いたりすることで、自分ひとりでは思いもつかなかった分野や古典にも関心をもてるんですね。発表を重ねるごとに、次の世代に朗読の響きが伝わって、年々レベルアップしていることを強く感じます。」

音読・朗読の響くまち、流山。子どもたちに育まれた「伝える喜び」は、大人にも、そして次世代の子どもたちにも、受け継がれていきます。

東京

2050年の大人づくり ～ESD(持続発展教育)の推進～

多摩市教育委員会

多摩市では、持続可能な社会の担い手を育成するために「2050年の大人づくり」をキャッチフレーズに、市内全小中学校で持続発展教育(ESD: Education for Sustainable Development)を推進しています。多摩市のESD推進の特色として、全小中学校で以下の4つに取り組んでいることがあげられます。

- 学校、市役所、教育委員会、市民が連携したプロジェクトを進めています。学校でゴーヤの種からたくさんの苗を栽培し、学校はもちろん、近隣の図書館や児童館等の公共施設、家庭や市民に育てた苗を配布し、グリーンカーテンを市内に広めています。
- ユネスコスクールへの全校登録を進めています。文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会は、ユネスコスクールをESDの推進拠点として位置付けており、多摩市でも、学校間のネットワークや地域間交流を通してESDの実践の充実を図っています。
- ESD推進に向けた教員研修の充実を図っています。学校にESD担当教員を置き、年間10回のESD実践研修会を実施しています。また、若手教員の研修プログラムにもESDを位置づけ、NGO(ESD-J)と連携した研修を実施しています。
- ESDカレンダーを全学校で作成しています。環境・国際理解・人権・平和・食育等、横断的な課題について、教科・領域の単元や活動の相互のつながりを明確にし、校内での共通理解を進め、ESDを計画的・継続的に取り組めるようにしています。

これまでも学校では、地域のよさを生かした価値ある教育活動が、潜在的に行われてきました。多摩市では、ESDの視点から学校の教育活動を見直すことで、自然や社会とのかかわり方が変わったり、人とのつながりが広がったりしています。将来の多摩市のまちづくりに参画できる人材の育成を目指して、今後もESDを推進していきます。



徳島

ドライバーへの一礼から 伝統を守る ～交通安全指導より～

東みよし町立昼間小学校校長 松浦 孝憲

昼間小学校は、北に阿讃山麓、南には吉野川が流れる、自然が美しい田園地帯にあります。一方で、校区内には四国縦貫道やその側道が通っているため、車両の通行も多く、交通安全指導に力を入れています。そのなかに、子どもたちが学校前の横断歩道を渡った後、車を止めてくださったドライバーへ「一礼」する伝統があります。

入学式直後の交通安全教室では、学級担任が新入生と一緒に道路に出て、安全な歩行や横断の仕方などを練習します。同時に、横断歩道を渡り終えた後は、左右のドライバーに向かい、「一礼」することを指導します。無事に道路を横断できた児童が、車を止めていただいた感謝を込めて礼をします。礼をすることで、通学路は自分たちだけの道路ではなく、譲り合ってみんなで仲よく安全に通ろうという意識をもつことができます。心を込めて礼ができるようになることが、本校のめざす児童像「思いやりのある子ども」にもつながっています。

地域のお年寄りが、学校を訪ねてくださったときの言葉です。「小学校の近くから町営バスを利用して、高校生とも一緒になりますが、どの高校生も、バスの乗り降りの際、必ず運転手さんに、『おねがいします』『ありがとうごさいました』と丁寧にあいさつをしているんですよ。みんな、昼間小にいた子たちです。バスに乗っているととても気持ちよくなります。小学校でのドライバーへの『お礼』の習慣が、自然にバスの運転手さんへお礼をすることにつながっているんですね。すばらしい伝統です。」

「相手にお礼を言う」習慣は、幼いときに身に付くと、意識しなくても、自然にできるようになるものだと思います。だからこそ、学校前の横断歩道を渡った後の「礼」を、これからも大切にしていき、末永く伝統として、受け継がせていきたいと考えています。



北海道

群馬

「心を耕す」 道徳の時間を 要として

はくちょうだい
網走市立白鳥台小学校校長
高島 忠弘

白鳥台小学校では、平成17年より道徳教育を学校研究課題に据え、要となる「道徳の時間」を中心に児童の道徳性を掘り起こし、自己の生き方についての考えを深める授業づくりについて研究しています。人間には誰しも弱い面があります。わかっている、なかなか道徳的価値を実現できない自分を見つめると同時に、それを乗り越えようとする自分にも気付かせ、児童一人一人が願いや希望を持てるような「道徳の時間」を追究しています。

「道徳の時間」の授業づくりにおいて、私たちは明確な指導観を持つようにしています。学年に応じた価値の押さえや内容項目相互の系統性や関連性、価値にかかわる児童のこれまでの学びを把握して本時のねらいを設定し、資料の活用方法や発問の構成について吟味していきます。児童は価値理解、人間理解、他者理解、自己理解を図りながら、「心を耕して」いきます。このような授業が全学級で行えるように、私たちは毎週「道徳の時間」の授業づくりについて研修を重ねています。

また、本校では、児童が道徳性を発揮する場面づくりを工夫しています。その一つが「はくちょう運動」です。白鳥台小学校の校名を頭文字にして、「『は』はきはきします返事や挨拶」「『く』苦勞があっても私がします」「『ち』違った時はごめんなさい」「『よ』用事の際は失礼します」「『う』うれしい行いありがとう」といった、児童の行動の指針を合い言葉にしたものです。この運動への取り組みを児童会が呼びかけ、毎月、各学級で具体的な目標を立てて、自ら進んで道徳的実践を行えるようにしています。

今後も、道徳的実践力の育成と道徳的実践の、双方の一層の充実を図り、6年間という長期的視野を持って、児童一人一人の道徳性を育てていきます。



ICTを活用した国語科授業

～1人1台のタブレット端末で
思考力・判断力・表現力を養う授業のあり方～

群馬大学教育学部附属小学校教諭
山本 宏樹／大島 崇

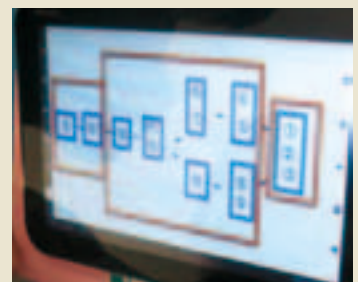
群馬大学教育学部附属小学校では、今年度、インタラクティブボードやタブレット端末を活用した国語科の授業の検証に取り組んでいます。

このプロジェクトは、群馬大学を中心として、附属小・中学校の各国語部会、デジタル教科書研究協議会（Ditt）の共同研究として始まりました。その目的は、国語科の各領域の学習において、ICTを活用して思考力・判断力・表現力を養う効果的な授業のあり方を検討するとともに、紙媒体の教科書やワークシートとの質的な差を解明することにあります。

これまでも、授業の中でプロジェクターや実物投影機などのICTの活用がなされていましたが、今回タブレット端末が1人1台導入されたことで、子どもたちがICTを活用できる環境が整い、学習活動の中で表現したり、表現した情報を共有したりすることが可能となりました。

例として、高学年のプレゼンテーションの学習においては、取材で写真を撮影する、撮影した写真をプレゼンテーションソフトで提示する、話し方を動画で撮影して相互校正するなど、様々な活用できることが明らかになりました。また、説明的文章の学習においては、描画ツールを用いて文章構成図を作成し、一斉に提示して話し合ったり、話し合った後に図を修正したりし、紙媒体のワークシートとは異なる活用の可能性も見えてきました。

検証は始まったばかりで課題点もありますが、今後も実践を通してICTを活用した国語科授業のあり方について、その方向性を明らかにしていきたいと考えています。



入賞作品発表



地球と
なかよし
大賞



地球とあく手出来るほど 仲良く

佐々木 開基

広島県 東広島市立河内小学校 6年

ぼくは、今の人と地球は、絵のように、まだあく手は、出来ていないと思います。なぜなら、地球温暖化や、戦争もどこかでおこっています。人と人どうし、国と国どうしが仲良くできていないのに、地球と仲良くなれるわけがありません。地球温暖化も、戦争も、一人一人が気がつけば、防ぎきれることだと思います。近い時に、地球と人があく手をしている絵をかいてみたいです。

評 人と人、国と国、人と自然がまず仲良く。その先に、絵のような、人と地球のあく手が待っている。一日も早くと。

環境大臣賞

田んぼパワー

松口 果歩・松口 莉歩

大阪府 こどもエコクラブ「ぼぼっぼくらぶ」
中学2年

田んぼはね苗を植える場所なのに
カイエビ、ミジンコ、イトミミズ
いろんな生きもの生まれてる
田んぼはね稲を育てる場所なのに
オタマジャクシ、ヤゴ、タニシ
いろんな生きもの育ってる
田んぼはね稲穂を刈り取る場所なのに
オンブバッタ、トンボ、チョウ
いろんな生きもの恋してる
田んぼはね何にもしてない時にでも
アメリカザリガニ、ドジョウ、ヘビ
いろんな生きもの休んでる
田んぼはねお米という命が実る場所だから
サギ、コオイムシ、レンゲソウ
いろんな命がつながって
アメンボ、スズメ、私たち
田んぼパワーで元気いっぱい



評 いつしか失っていた田んぼパワーを取りもどし、こんなに豊かな、にぎやかな田んぼの合唱、合奏。楽しみたい。

地球となかよしメッセージ

第10回の節目を迎えた「地球となかよしメッセージ」。

今回は、第10回記念特別テーマ「紹介したい！わたしの大切な人」も加え、例年にも増して、パラエティに富んだ、すばらしい作品の数々が寄せられました。

◎協賛／日本環境教育学会 ◎後援／環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

特別テーマ
「わたしの大切な人」賞



信友

村上 結衣子

香港日本人学校小学部香港校6年

運動会で私たち6年は、組体操をやりました。

その中の2人技、「サボテン」は雨のせいでグラウンドがベチョベチョだったので、やりにくく失敗する人たちがたくさんいました。

私の場所もやりにくく、上の子が「もう落としていいよ。」と言ってくれましたが、小学校生活最後の運動会だったので、絶対成功させたくて、「大丈夫。まかせて！」と言うと、上の子は「分かった。」と言ってくれました。

その言葉がとてもうれしくてうれしくてたまりませんでした。まるで、「信じてる。」と言ってくれているようでした。

そのしゅん間、「サボテン」は成功しました。

評 「親友」とは、身も心も支え合う「信じ合える友」という言葉に、「その通り」と心からの感動を覚えました。

全国小中学校
環境教育
研究会賞

カニとザリガニ かわいい

赤井 優太

広島県 東広島市立河内小学校1年



ぼくは、地球と、海となかよくなりたいです。海の中にはたくさんの魚がいて、その魚たちはずっと生きて楽しくくらしたいと思っています。ぼくたちは、魚となかよくなるために、魚がずっと生きていられるように、きれいな海を守っていかないといけないと思っています。

評 カニ、ザリガニ、魚が、色あざやかに豊かな海で生き生きとくらしっています。この海を守るのが私たちです。

日本環境
教育学会賞

経田 美美子
東京都 荒川区立瑞光小学校4年

おこらないでね。



この前の3月11日に東日本だいじんがありました。じんがおきてしまったのでひがいにあった人たちがたくさんでました。テレビのニュースをみていたら、たぶん地球がおこってゆれているんだなと思いました。私はおこっている地球におはなしをしてあげたり、「もしも、おこりたくなったら私にそうだんしてね。」と言ってあげたいです。

私は、地球がポイステヤたばこの火でもういやだと思っています。おこっているのだと思います。だから、これからはそういうことをしないで地球をおこらせないで、また、ひがいでたくさんの人をがしなないようにがんばって地球をおこらせないようにしていきたいです。これからは地球もえがおでいてほしいです。

評 私たちが地球をおこらせてしまった。「ごめんなさい」とあやまり、だきしめている、あなたの指先に未来がある。

毎日
新聞社賞

オセロゲーム

水野 友瑛

神奈川県 相模原市立鶴野森中学校3年



【評】人間自らが生み出した黒い魔物。その罪に自ら気づきどう乗りこえるか。その覚悟を厳しく問うています。

人類はこのごろオセロゲームを始めたらしい。対戦相手は自らが生み出した悪の魔物。ヒトを含む、生物が立つ足場を蝕む奴らだ。数年前に人類はボード盤を見て、慌てふためいた。それは、ボード盤は真っ黒だったから。ちょっと前に盤を発見したのに、すでに真っ黒。とてつもなく大きな問題だと気付いた時、人類の戦いは始まった。「地球環境問題」に対抗するため、ボード盤の色を自分たちの色である、白色に戻すために。しかし、相手は自分の化身であり、「身から出たさび」が相手なのだ。芋づる式に問題は飛び出し、数年たっても白色はまばら。その上、微小ながらも、新たな問題が飛び出してきた。

宝飾品として名高いプラチナの産出量の3/4は南アフリカで産出される。今、プラチナは、自動車の排気ガスを浄化するのに必要不可欠な存在としてなりつつある。非常に希少なもので、現地でははずめの涙ほどしかないプラチナを採掘するために、こうこうと最深部まで明かりを灯し、熱を冷ますために、空調を効かせるなどといったことに、膨大な電力を消費する。目を転じれば、地球温暖化の原因である、二酸化炭素を大量に排出する、火力発電による発電がもたらした。今や南アフリカの二酸化炭素排出量はフランス等の先進国を上回る勢いだ。

唾然茫然だ。白のつもりで置いたコマが黒に変わっているのだから。人類の儲け主義によって生まれた敵はある意味、人類が過ちを犯したことを教えようとした。しかし、ヒトは気付かずにまた同じことを繰り返す。変わろうとしているエネルギーですら、金儲けに変えようとするのだ。この考えが変わらないかぎり、人類は罪を減らし、生き残ることはできない。

動物のほうがよっぽど頭がいい。意図せずに地球とうまく共生してきたのだから。もしかしたら、人類を嘲笑っているかもしれない。しかし、動物たちもこの戦いに巻き込まれるのだから、随分、皮肉なものだ。

毎日小学生
新聞賞

おじいちゃんといっしょに

榎 詩乃

広島県 尾道市立高見小学校4年



私はおじいちゃんからギターを習っています。9月にたん生日会があるので発表するためにがんばっています。おじいちゃんといっしょにできるか分からないので、今のうちにたくさん教えてもらおうと思います。親指のママは、かたくなってギターがひきやすくなるそうです。これからもギターをがんばります。

【評】目をとし、耳をすましてギターを習う真けんな姿。おじいちゃんのほほえみ。あなたの親指のママが印象的です。

◎審査委員(敬称略)

有田 和正 (東北福祉大学教授)

尾形 鉄二 (環境省総合環境政策局 環境教育推進室室長補佐)

角谷 重樹 (国立教育政策研究所教育課程センター基礎研究部長)

河野 えつ子 (全国小中学校環境教育研究会事務局/東京都板橋区立西向原小学校校長)

朝岡 幸彦 (日本環境教育学会事務局/東京農工大学大学院農学研究院教授)

児島 邦宏 (東京学芸大学名誉教授)

中村 秀明 (毎日新聞社「教育と新聞」推進部長)

小林 一光 (教育出版株式会社取締役社長)



学校賞 東京都 世田谷区立祖師谷小学校

みんなの森 中島 慎之介 6年

ぼくの住む祖師谷には「みんなの森」があります。地域の人達が昔からの自然を守るために木を植えて、雑木林や草原を作っています。昔からある、太いクヌギの横には、新しくうえた若いクヌギの木が立っています。この森は生き物が住みやすい場所で、クヌギにはカナブンやカブトムシ、草原にはトカゲやカナヘビ、バッタなども見かけます。東京の住宅地にこんなに自然にふれあえる場所があるなんて素敵な事だと思います。むずかしい勉強なんかないでも、たくさんの命にふれあう事で、自然の大切さを学べます。

この森を作った人達に感謝すると共に、こういう活動が世界中に広がったら素敵な地球になると思います。

ぼくの大切な人 南 流佳 6年

ぼくが紹介したい、大切な人は、ひいおばあちゃんです。

なぜなら、ぼくの大好きなお米を作っているからです。

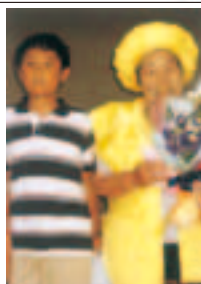
ひいおばあちゃんは、二十代の頃から六十年以上お米を作り続けているそうです。米作りで一番大変なのは、田植えの作業だけ、やめようと思った事は一度も無いと言っていました。

ひいおばあちゃんは今年の夏で、八十八歳になったので、みんなでお祝いしました。九十歳までお米作りを続けると言っていました。ぼくはずっとひいおばあちゃんのお米を食べたいなと思ったので、元気で長生きしてほしいです。

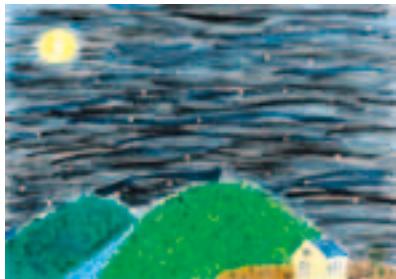


増えるといいな! 緑 大林 桃 6年

私のおばあちゃんの家周りには、緑がいっぱいあります。毎年、夏休みにも行っているくらいです。私は、そんな緑がいっぱいな所が大好きです。緑にはすごい力があると思います。例えば「グリーンカーテン」という名の、人を強い日ざしから守ったり、すずしくしてくれたり、目をうるおしたりと、色々な力があります。そんな緑は、地球にとって大切な存在だと思います。もっと、自分の周りに緑が増えたらもっと色々なすごい力になるだろうと思いました。



入選作品



ぼくの じまの よぞら

宮本 一 広島県 尾道市立高見小学校2年

ぼくは いえから見える よの ほしぞらが 大きいです。みんなに 見せてあげたいです。



永田 理紗 静岡県 静岡県 ことエコクラブ「ART-NEエコクラブ」中学3年

生命をはぐくむ砂浜

海浜植物が茂る海岸で偶然見つけた卵。

これは、夏になると南の島から繁殖のためにやってくるコアシサシのものだ。草や木などで巣を作らず、直接砂浜に産卵した卵は、気をつけないと踏んでしまうほど、砂と見分けがつかない。

私は腹這いになり、コアシサシの目線で海岸を見てみた。ハマボウフウなどが生える植物帯は、うち寄せる波やカラスなどの外敵から卵を守ってくれる場所であることがよくわかった。

小さいながらもその存在の大きさ、生命を育む素晴らしいさを感じた瞬間だった。



すてきなグリーンカーテン

藤木 花穂

東京都 台東区立根岸小学校2年

わたしの家は、ちきゅうおんだんかたいさくで、グリーンカーテンを作りました。見た目もすずしく、下に行くとすごく気持ちいいです。生きものたちもグリーンカーテンのおかげで、生き生きとくらしています。



カニさんの絵

松口 歩佳

大阪府 ことエコクラブ「ぼぼっぼくらぶ」小学2年

カニさんが、すなでだんごをつくって、絵をかいていたよ。なんの絵かな？ カニさんかな？ タコさんかな？ クラゲさんかな？ サカナさんかな？ もしかして、わたしのかおかな？ わたしも、貝がらをひろって、絵をかいたよ。なんの絵かわかる？



紹介したい人 お母さん

安東 悠希

聖学院アトランタ国際学校 小学6年

世界にはいろんな人たちがいますが、1番紹介したい人は私の母です。

ボランティアでアフリカやハイチに行き、医者（麻酔科）として働く、私のお母さん。人の命を抱えて懸命に働いているうえに、2人の子供を育てている私の大切な人。私の前ではいつも素晴らしい笑顔でいてくれるけど、仕事の時はとっても真面目な顔。“お腹痛い”や“頭痛い”と言えば医者らしい質問を言い、答えたらすぐに治療。

私の母がいる場所で誰かがけがをすれば、必ず私の母が診たり、治療をする。私だけでなく、周りの人も安心してくれることが、母にとっては本当に嬉しいことなのだと思います。



学校賞 中部テネシー日本語補習校



みんなで力を合わせれば 木下 立揮 4年

ぼくは、今アメリカのテネシー州に住んでいます。夏休みに、日本に一時帰国したときに、じしんのえいきょうで、節電という活動をしていました。その時、ぼくは、「みんなで力をあわせれば。」というのが、頭にうかんできました。今、日本は、自動販売機や、スーパー、市役所は、ちゃんと節電していました。これから、一つの国が、大へんな事になったら、世界中の人が助け合えばいいと思います。

学校賞 大阪府 大阪市立中浜小学校



折り紙 - Origami 栗田 和陽 4年

ぼくはアメリカのケンタッキー州に住んでいます。多くの通っている小学校にはいるいるな国から来た人がいます。年に一度インターナショナルフェスティバルという自分の国を紹介するお祭りがあって、ぼくはそこで日本の折り紙のことを紹介しました。お母さんに手伝ってもらって花や動物、楽器などを折ってみんなに見せてあげました。そしてつるの折り方を教えてあげました。お友だちは折り紙が初めてだったので折るのがむずかしかったようですが、とても上手にできました。折り紙は楽しい、と言ってくれたのがとてもうれしかったです。ぼくはこれからお友だちに日本のことを教えてあげたいです。



木 村上 樹 6年

この木は下水しょ理場で見つけました。大きくて長いとても立派な木です。まわりにも木はあるけどこの木が一番立派だったので取りました。この木が地球からはえていると思うとぼくは「ぞくっ」とします。こんな木がもっとももっと増えると地球温暖化もなくなるかなあ。



地球となかよしゼミナール



2011年3月の東日本大震災から、もうすぐ2年。
復興に向けて取り組む子どもたちの姿を、3回にわたって紹介します。

海と生きる

～わかめ養殖で学ぶ自然と産業のかかわり～

岩手県 大船渡市立末崎中学校校長

吉田 昌陽

大船渡市の最南端にある末崎中学校。

東日本大震災では、高台にある校舎への津波被害はありませんでしたが、地震被害は甚大でした。また、約4割の生徒宅が全壊、流失、半壊等の被災をしました。現在は、校庭に仮設住宅が建ち、学校生活に制約はありますが、生徒たちは元気に学校生活を送っています。

地元・末崎町は、国内わかめ養殖発祥の地であり、わかめ、ホヤ、ホタテなどの養殖漁業が盛んです。末崎中学校では、平成14年から、総合的な学習の時間を「産土タイム」(「産土」とは「その人が生まれた土地」の意)と称し、全校テーマ「海と生きる」のもと、地元のわかめ養殖組合などの協力を得て、「わかめ」に関するさまざまな活動を続けてきました。末崎町に生きる生徒が、町の生計を支える産業を学ぶことで、地域に生きる人間としての自覚を育ててきたのです。しかし、津波で船や養殖施設が流され、地元の養殖漁家の数も約三分の二に減ってしまいました。

3月11日の震災後、学校は4月21日ようやく再開しました。当初は、「わかめ学習」の再開どころではない状況でした。海への恐怖心を抱える生徒もいました。

その後、末崎のわかめ養殖組合は、復興の第一歩として、養殖の再開に立ち上がりました。そして、組合員の皆さんから、末崎中の生徒のために協力すると

いう力強い言葉をいただいたのです。

先生たちには、生徒のこころのケアに努めること、協力していただく方々への感謝の気持ちと地域復興の一役を担う意識を持たせる指導を行うことを伝えて、末崎の産業復興を学ぶべく、わかめ学習は再開しました。

各学年の活動の概要です。

【1年「海と共に」】末崎のわかめ養殖を知る座学から始める。ロープ等養殖施設の整備、わかめ種苗の巻きつけ作業、刈り取り作業を行う。刈り取り後、すぐ湯通し・塩蔵加工作業。

【2年「海の恵み」】1年のときに収穫・塩蔵したわかめから茎と葉の部分を分離する芯抜き作業。パッケージ詰めを行い、「ふれあいわかめ」として製品を完成させる。修学旅行先の東京都内で販売体験を行ってきたが、平成24年度は盛岡市で行った。流通業のプロから「よいところ

をどうアピールするか」など販売技術も学び、「商品」としてのわかめが消費者の手に渡るまでを体験。

【3年「海を守る」】国有林内に所有する学校林「産土の森」で、わかめを養殖する海に、栄養分をたっぷり含んだ川の水が流れ込むように、植林、下草刈り、間伐等の作業。森林と海が密接にかかわっていることを学習。地域産業の復興にも通じることを学ぶ。

「わかめ学習」開始から11年。生徒たちは、地元の優れた素材であり、誇りでもある「わかめ」について、生態、養殖、製品化・販売、環境保全等、一連の学習を熱心に行い、自然と産業の深いかわりを学んできました。これからも末崎中学校では、「末崎の復興は自分たちが担う」という意欲をもって、活動に取り組んでいきます。



生徒の声：「震災があってもうできないかと思ったが今年もわかめが育てられてうれしい。」「先輩たちが続けてきたわかめ養殖体験を、自分たちもやりたいと思っていた。今まで一生懸命育ててきたわかめが商品になり、感動した。」

疑似科学との

つきあいかた

第1回



長崎大学教育学部

教授 上 蘭 恒太郎

教授 武藤 浩二

准教授 長島 雅裕

「水にありがとうという言葉を見せると、凍るときにきれいな結晶ができる（水からの伝言）」……この話を聞いたことがある人、信じている人もいらっしゃるのではないのでしょうか。

このコラムでは、「科学のようで、実際には科学でないもの」——「疑似科学」と、それのもたらす問題について、数回にわたって書いていきたいと思えます。「疑似科学」の例としては、ゲーム脳、EM菌による環境浄化、血液型による性格診断、マイナスイオンが健康によいなど、さまざまなものが挙げられます。また最近では、原発事故に関連して、EM菌で放射性物質を除去する・髪の毛で被曝量を検査するなど、人々の不安に乗じた商売が善意を通じて広まったものもあります。

私たちは、このような「科学のふりをしたもの」が、

学校にも入り込んでいることを問題視し、疑似科学の教育現場への浸透度について調査を行ってきました。2011年に行った、8大学の大学生約1,400名と2校の高校生約300名へのアンケートでは、1割強の168人が、「水からの伝言」など、疑似科学に否定的でない授業を経験した記憶があると回答しました。他方で、疑似科学に否定的な授業を経験した例は、ごくわずかです。

教育現場に、冒頭に挙げたような、「水からの伝言」に代表される疑似科学が入り込んでいることについては、数年前に日本物理学会のシンポジウムなどでも議論されていますが、現在でもまだ、道徳、そして理科の授業でも取り上げられています。いい言葉は力を持つ、と信じたい気持ちはわかりますが、人の価値観と自然現象は関係がありませんし、良い言葉、悪い言葉と一つの尺度で単純に切り分ける考えも疑問です。疑似科学が教育現場で使われる場合、子どもにどのように考えてほしいかの意図がある場合がほとんどですが、意図に合うおもしろそうな材料があると、教員が自分で批判的に考えないまま授業に持ち込む例が見られます。これは、子どもに将来、どのような知的な力をつけたいのかという視点が不足していると言えるのではないのでしょうか。

子どもたちが将来、疑似科学にとらわれず自分で考える力をつけるために、学校の知識を生活と結びつけて考え、位置づける思考が必要です。考えて判断する力、課題を見いだす力が問われています。その方向の一つに、リテラシー、問題解決力というPISAの考え方を例として挙げるすることができます。

長崎大学教育学部では、「教師を目指す皆さんへ」として、「疑似科学とのつきあいかた」という講義を行っています。学生たちに、「自立して考えるためにどうすればいいか」という視点を持ち、批判的に考えることができるようになってほしい。そしてまた、子どもからの批判も受け止めて対応できる力量をもった教員になってほしいと願っています。☺

イラスト ひらた ゆうこ <http://rakugakiya-yh.com>

音楽のおくりもの vol.1

東日本大震災 復興への願いを込めて

子どもたちのメッセージが、合唱曲になりました。



子どもたちの詩によるエール

みんなはひとつ

- 東日本大震災 復興支援 CD 付き曲集「地球となかよしメッセージ」より
- このピースの収益は、震災復興のための寄付とさせていただきます。
- 定価：1,260円(本体1,200円+税)

【お問い合わせ】
教育出版株式会社 編集総括部 TEL03-3238-6862

群馬大学大学院工学研究科
広域首都圏防災センター 准教授

金井 昌信 さん

防災教育で子どもをどう育てるか

東日本大震災の後、防災教育のカリキュラムづくりの依頼が非常にたくさん来ました。しかし、学校の先生方と話していると、「学校で災害が起きたときに、子どもたちをどう守るか」に視点が集中しているんです。避難計画と防災教育は、分けて考えるべきです。学校で子どもをどう逃がすかという避難計画は、先生方で学校の危険性と周辺の様子を踏まえて計画を立て、子どもが動けるように訓練すれば解決します。目を向けるべきなのは、義務教育の中で、どういう順番で何を教え、どういう子どもになってほしいかという観点です。

現状は、防災や教育、地震などの事象の専門家がそれぞれの専門分野からのアプローチを行っていて、防災教育で子どもに何を身につけさせるかということが、ばらばらなんです。私たちは、自然現象や避難の仕方を教えるにとどまらない、もっと上位の概念が必要だと考えています。子どもが学校にいないときにもちゃんと逃げられるか、もっと言えば、長い人生で、どこでどんな災害に遭っても、しっかり逃げられる人にならなければいけないということです。

地域に住まう「作法」を学ぶ

防災教育において最も大切だと考えるのは、姿勢の部分です。自然と人間社会のかかわり方を理解し、その地域に住まう姿勢を教えていく

ことが防災教育だという捉え方です。「薺しの防災教育」はよくない。「郷土を愛する」という観点が多くの授業に取り入れられているのに、防災教育で、この地区は近いうちに水浸しだとか、こんなに危険だといったことしか教えなかつたら、子どもはそこに住むのが嫌になりますよね。

この地域では、自然からこんな恵みを受けているからこそ生活ができる。だからこそ、この地域が好きになる。恵み多い地域だからこそ、ここに住まい続けるのだったら、起こる可能性がゼロではない災害のやり過ごし方もちゃんと勉強しよう、それがこの地域に住まう作法だ、ということなんです。

防災教育は学校の中だけのものではない

各地でいつも言われるのが、「防災教育に割く時間がない」ということです。私は、防災教



育カリキュラムづくりに携わっている地域の先生方と一緒に、小中学校の全教科の学習指導要領を見て、津波・地震なら、この項目と関連できるなど、各教科の教える内容に遡ってチェックしました。改めて防災教育という授業時間をとらなくても、教える教員側にその意識があれば、小1から中3まで、教える時間は相当あります。今、最も懸念していることは、震災から2年近く経って、もう防災に対する意識が冷めてきている感があるなか、学校で先生たちががんばって教えても、大人の行動とのギャップがあると、子どもはすぐやらなくなるということです。学校で、「避難勧告が出たら逃げろ、何もなければ、よかったねと家に帰ればいい」と教えていても、家庭では、「どうせ何も起こらないから逃げなくていい」とか「何もなかったから逃げて損した」と文句を言う。こういう状況だと、子どもは、学校でやっていることは現実的でないと考えて、学校の外に出た瞬間にやらなくなるのは目に見えています。ですから、学校と地域や家庭との連携が大事なんです。

津波防災教育に取り組んだ釜石では、子どもに教えることで、保護者を巻き込んで、地域全体に取り組みを広げていきました。学校で教わったことを、卒業した子どもが継続できる社会にしていけることが、防災教育の目的です。防災を一つのきっかけとして、地域や家庭との関係をつくっていくことも大事なことだと思います。

群馬大学 災害社会工学研究室
http://dsel.ce.gunma-u.ac.jp/index.html
釜石市・尾鷲市の防災教育の手引き・各教科への
防災教育の取り込み例などが見られます。

かない まさのび 1976年生まれ。工学博士。群馬大学・片田敏孝教授とともに、全国各地の防災計画策定や防災教育カリキュラムづくりに取り組む。釜石での津波防災教育は、東日本大震災における小中学生の適切な避難行動につながった。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆巻頭インタビュー、鴻上尚史さんの「三つの輪の言葉」は、指導者たる教師が身につけてほしいものであり、研究会などで大いに話題にしていきたい。(埼玉県 齊藤有雄) ◆教職員提案制度から生まれた「ふるさと松山学」の実践は、我々教育関係者への贈り物ではないでしょうか。松山市の小中学生が、テキストと実際の足跡、句碑などをうまく活用しながら、笑顔で郷土を学習している様子が手に取るようになります。(北海道 飛鷹保廣) ◆京都市立下京中学校の体験・探求学習「京都学」、愛媛県松山市の「松山学」など、教材や学びを地域(故郷)に向けている。こういう傾向はとてもよいものと感じました。寺田美弥教諭の伝え合う活動の実践、杉本陽子教諭の教員開発にも感銘を受けました。このような先生方が学校現場におられることに、日本の教育のすばらしさがあるのだと、改めて感じた次第です。(茨城県 R・T)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わるうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。